優秀賞
— 福島県知事賞 —

study×vacation

慶應義塾大学環境情報学部・1年　中川（ナカガワ） 佳子（カコ）

10年後の福島は「学生がたくさん訪れる場所」になって欲しい。町が活気付くためには若者の力が重要だが、少子高齢化が全国的に進み、出生率をあげることは容易ではない。そこで、福島出身の若者を増やすのではなく、福島に思い入れのある若者を増やすことに力を入れていくのはどうだろうか。

キーワードは「ワーケーションの聖地×学生」、つまり大人向けの「work×vacation」ではなく学生がオンライン授業を受けるのに適した「study×vacation」である。ポスト・コロナ社会における新しい学生と地方の関わり方を提案したい。

現在、オンライン授業が当たり前となりキャンパスにいなくても授業を受けられるようになった。地方から上京した一大学生（新入生）として、コロナ禍の生活を振り返ってみると、友達もいない知らない土地でひとり部屋に籠もってパソコンとにらめっこ、もしくは実家で、家族は普通に仕事や学校に行き友達と遊んでいるのを横目に、一人部屋に籠もって課題をしていた。ニュースでは大学生が精神的にも金銭的にも困っている、自主退学、自殺者が増えているなどマイナスな現状を目の当たりにしてきた。

そんな中、サークル活動で福島に2日間訪れる機会があり、原発事故の資料館や立ち入り禁止区域のフェンスを見た。たった2日間の出来事でも福島への思い入れができ、今後も福島の復興を見届けたい、関わっていきたいと思えた。そこで、東京からアクセスがしやすい立地を生かし、関東圏の大学生がコロナ疲れをリフレッシュできる場を用意することで、福島への関係人口を増やすことができるのではないかと考えた。そして将来的に福島に移住もしくは関わりたいと思ってもらえる人も増えることを期待する。

具体的には、大学生が短期で福島のどこかに宿泊し、大学の授業を受けつつも自然に囲まれてリフレッシュできる機会を用意する。地域クーポンを発行することで学生は街に出て食事をし、テイクアウトをして宿で酒を飲む。休日には、福島の震災からの歴史に触れられる機会や福島の農林水産などで日雇いのお手伝いの場を用意する。ここで福島の歴史や現状を体験することができれば、風評被害を取り除くことにつながるかもしれないし、福島に思い入れができるかもしれない。またいろんな大学の学生が集まるので、学生同士の研究発表の場があれば、他分野の研究に触れることで自分の研究を深めることができるかもしれない。このように学生にとっても地域にとってもメリットがある。また大学生を対象とした理由の一つには、福島県浜通りに大学が少ないことも挙げられる。地域にとって若者は町を出ていくのが当たり前だが、この機会を利用して短期間でも若者が福島に集まる。この機会を目にした地元の子供たちは自分の町には魅力があることを実感するかもしれない。それにより地元の子供たちが福島を愛し、将来福島に戻ってくることも期待できる。また、学生たちには福島で子供たちに教える勉強会やイベントを企画してもらうなどのワークショップを行い、より地域と密着した体験ができるようにしたい。同様の取り組みとして、県内に大学が少ない和歌山県では「大学のふるさと」制度を独自に実施しており、各市町村が都市部の大学と連携している。今回提案した福島と学生の関わりでは、大学と市町村をつなぐのではなく、一学生と福島をつなぐ良い意味で敷居の低いものである必要がある。なぜなら授業の一貫という位置付けとなると単位など余計なものが関わってしまうからである。現状の大学生は夢見たキャンパスライフを送れず旅行も自由にできないため、このような機会は記憶に強く残るだろう。つまりこの機会では、いかに気軽に参加してもらうか、福島の将来性や魅力を若者に見せられるかが重要である。

参考サイト：和歌山県、和歌山が故郷になる「大学のふるさと」制度について